

定期報告書レポート（短期）

タイトル. 「東南アジア・米文化の精霊的な面からの考察」を見て

2015年5月10日～14日

私のタイでの受入者である、ナルモン・タマブルックサーから誘われ、Spiritual Dimensions of Rice Culture in Southeast Asia（東南アジア・米文化の精霊的な面からの考察）なるイベントに参加した。主に、観客としてだったが、少しだけ、装飾のお手伝いもした。今回のリサーチの趣旨とは少し離れているが、東南アジア各国の身体表現をたくさん見ることができた有意義な機会であった。



※右の写真は、装飾を手伝っている私。

SEAMEO SPAFA（東南アジア外交使節団教育機関の、考古学・芸術学地域センター）というところが主催のイベントで、昼間は研究発表（英語）、夜19時からASEAN各国の、米の収穫を祝う儀式的パフォーマンスを紹介するプログラムであり、特に、夜のパフォーマンスはとても興味深かった。プログラムは以下の通り。

11日

1. Bringing Home the Rice Goddess Dewi Sri インドネシアのジャワ島の影絵
2. Khuong Mua Festival ヴェトナムの部族の儀式
3. The Cycle of Rice Rituals of Myanmar ミャンマーの儀式と舞踊
4. Tayub Tanam Padi インドネシアのジャワ島の舞踊

12日

1. Monogit/Humabot/Magavau マレーシアの儀式
2. Kun Preah Me カンボジアの舞踊
3. The Lao Traditions of Rice Cultivation ラオスの舞踊
4. Singing in the Rice Culture of Bali インドネシアのバリ島の儀式
5. Vietnam Youth Theatre 「ベトナム青年劇場」のダンス・パフォーマンス
6. Tamarok Parai Ritual ブルネイダルサラームの儀式
7. Reyog Performance インドネシアのジャワ島の儀式

14日

1. Tayub Panen Padi インドネシアのジャワ島の儀式
2. Bidayuh Bijagoi Biratak マレーシアの儀式
3. Ton' ak Ifugao イフガオ(Ifugao)の儀式

※イフガオは、フィリピン・ルソン島の棚田で有名な地区、及びそこに住む少数民族

4. Beating the Rice Stalks タイの儀式
5. Dedication to the Rice Goddess タイのアユタヤの儀式
6. Eating the New Rice Crop タイの儀式
7. Honour the Rice Goddess インドネシアのバリ島の舞踊
8. Joged Bumbung インドネシアのバリ島の舞踊

※他に、プログラムに書かれていない儀式が一つあったが、情報不明。

※10日は準備。13日は、プログラムはお休みだったため、インドネシアのバリ島チームと、Siam Niramit Showを見に行った。

毎日3時間を越える催しで、最終日の14日は5時間の長丁場であった。東南アジアと一括りにできないような多様性がありながら、日本の古典芸能や祭りの原型を感じさせるものが多数あった。獅子舞、天狗のお面、歌舞伎の型などなど。

※ 右の写真は、獅子舞を思わせるインドネシアの仮面。

Reyog Performance



その中でとりわけ、私の興味を引いたのは、インドネシアのそれぞれのパフォーマンスだった。興味を持ってネットで調べた知識によると、インドネシア、とりわけバリで見られる、観光客向けの芸能・美術のほとんどは、1920年代以降のオランダ植民地時代以降の歴史の中で、バリを訪れた欧米人との共同作業によって構築されたものである、らしい。つまり、伝統芸能のエンターテインメント化、もしくは、現代化に成功したということなのだと思う。（あくまでネットの知識なので、帰国したら、きちんと調べたい）

そういう視点で各国の儀礼パフォーマンスを見ると、ある部族の素の形そのままの儀礼は、やはり、私のような部外者の外国人には退屈だし、儀礼の中の舞踊を見ていると、驚くほど踊りが下手な人が参加しているのだ。つまり、部族の儀礼では、村落の全員が参加するし、見せる（魅せる）ことは最重要ではないから、踊り手が洗練されていない。

比べて、インドネシアの踊り手は、職業性を感じさせる。全ての踊り手が、ある一定のレベルに達している。衣装も、民族的な要素がありつつも、よく見れば洋服がアレンジされたものだ。そして、そのように、現代化されているもののほうが、私にはおもしろく感じた。インドネシアの芸能が、どのように観光化・現代化されたのかを調べることは、とてもおもしろいのではないだろうか？

加えて、部族の儀礼パフォーマンスを除き、ほとんどの儀礼パフォーマンスに、各国の大学の演劇・舞台芸術学の先生、生徒が参加していた。つまり、大学が、伝統芸能を教えるシステムが各国で確立されているのである。羨ましくも感じたし、日本の演劇教育に対して、危機感も覚えた。私は、大学時代、全く演劇に興味が無かった人間で、学部も環境情報学部という、よくわからない学部なので、ロシアのように、演劇エリートじゃないと演劇を職業にできないというのだと、困ってしまうのだけど、しかし、もう少し教育システムが整ってないと、やばいんじゃないの？日本！とは思う。私自身も含めて、日本の演劇人の、演劇に対する教養の浅さを外国人と接していると感じてしまうからだ。